

## 第 9 期吹田健やか年輪プランにかかる高齢者等の生活と健康に関する調査報告書 グループ協議まとめ

### (1)生きがいつくりと健康づくり・介護予防の推進

#### ①関心が低い人、行けない人をどうつなげていくか

##### ●居場所の工夫

- ・ふらっと立ち寄れる居場所(スーパーのイートイン、福祉施設でクールスポット)
- ・時間や期間に縛られない(いつでも参加可能、出入り自由)
- ・買い物ついでに立ち寄れるなど普段の生活の場での居場所作り

##### ●取り組み内容の工夫

- ・食事や食料に関わる内容
- ・季節感のある催し(体育祭、盆踊り)は「ちょっと見にいつてみよう」と思う高齢者も多い。
- ・男性の特徴(目的がハッキリしている、スキルを発揮できるなど)に沿った内容
- ・女性の特徴(仲間意識、話好きなど)に沿った内容
- ・万博について話し合う(1970 大阪万博の思い出など)、万博をキーワードに地域のつながりづくりや地域の活性化、世代間交流

##### ●多世代との交流

- ・学生との交流(スマホ相談会など)
- ・ラジオ体操などで幼児～小学生などの子どもも共に参加できるイベント

#### ②担い手をどのように増やすか

##### ●住民以外の参画

- ・福祉事業所の力(強み)を借りる。
- ・学生(中学生～大学生)の強みを活かす。
- ・地域資源のコーディネートは生活支援コーディネーターが果たせるのではないか

##### ●担い手＝団体役員(委員)にこだわらない

- ・団体(グループ)に所属しなくても、イベントの一部(スポット的な手伝い)を担ってもら
- ・豊富な経験や知識を持っている方の強みを発揮できる場で活動
- ・これまでに培ったスキル(昔取った杵柄)を発揮できる場

### (2)地域における支援体制の充実

- ・宅配等を行う事業所が、地域で見守り
- ・子どもが参加すると必然的に親世代も参加する。子どもや保護者に向けたイベント企画するのも地域との繋がりを作るには良い方法
- ・活動を継続することで、少しでも意欲のある方が集まり仲間が増える
- ・高齢者支援のキーとなる地域包括支援センターを知らない住民もまだまだ多い。
- ・地域包括支援センター入口の「見せ方」の工夫が必要ではないか。

### **(3)認知症施策の推進**

#### **①みまもりあいアプリの活用**

- ・子どもの反応がいいと保護者も喜ぶ。子どもへのアプローチを通して保護者への関心を高める
- ・商店街でアプリを使ったイベントを企画することで、楽しみながら認知症の啓発を行える
- ・みまもりあいアプリの周知が必要。
- ・イベントを通して認知症になっても「住み慣れた地域で暮らす」という啓発を広める。

#### **②認知症の理解を深める取組**

- ・9月の認知症月間(旧アルツハイマー月間)でのイベント実施や周知
- ・認知症サポーター養成講座を受講した後に活動できる場が少ない
- ・吹田市内でチームオレンジ立ち上げ活性化
- ・認知症カフェなど認知症の方の居場所などの情報を専門職(支援者)に知ってもらう。

#### **③家族負担の軽減について**

- ・介護者家族が抱え込まずに相談や話ができる場の充実
- ・「認知症」の名称が入らない居場所(認知症に配慮したルールは必要だが)

### **(4)生活支援・介護サービスの充実**

- ・団塊世代が介護保険サービスを必要になる頃には十分サービスを受けられないのではないかと心配
- ・若者が福祉の業界に関心がない。関心を持ってもらえるよう福祉ではないイベントからアプローチが必要

### **(5)安心・安全な暮らしの充実**

#### **①在宅医療について**

- ・在宅医療を受ける条件は？通院との違いは？どのような治療が受けられるのか？が分からない。
- ・在宅医療に関する周知を強化する

#### **②特殊詐欺被害の防止**

- ・ICT 化が進むと同時に特殊詐欺も増えている
- ・被害はお金だけでなく「子に知られると叱られる」といつまでも気持ちが落ち込んでいる